

# 「共に学び、共に育つ」教育が、共生社会をつくる

JICA インクルーシブ教育研修

2022年1月25日

松森俊尚

## 「共生」の思想との出会い

40年近く前に初めて沖縄を訪れた時のことです。

現地の方に沖縄戦の話をついでながらガマを案内していただきました。当時は遺品や遺骨が残されていて「これは背骨でしょうか」「これは子どもの骨かもしれませんね」と静かに畏敬の念を込めた声で話されました。私は体が震え、言葉が無くなり、周囲の景色が消えて真っ白になりました。初めての経験。今何かを託された、決して人として裏切ることのできない何かを。そう直感しました。「魂のバトンリレー」と私は呼んでいます。

沖縄に通い詰めおじいやおばあさんと話す内に、沖縄の人は亡くなった方の魂と共に生きておられるのではないかと、共に生きる魂の数だけ、人は優しく強くなれるのかもしれないと思いました。私が「共生」を考えるきっかけでした。人間は生き延びるため共生を求める。魂とも共生する。共生しなければ生きて行けない。

学校では障害のある子もいない子も、人種や民族や国籍の違う子も、自分の性に戸惑い悩む子も、家庭環境や性格の違う子も、「点数」の取れる子も取れない子も一緒に生活して学び合っています。学校の宝物です。多様性を認め合いながら共に学び共に生きる教育は、インクルーシブ教育として世界中の教育の現場で取り組まれています。日本政府も国連の条約を批准し法律も改正して「推進」をうたっています。

## 点数という物差しだけでは測れない「学ぶ力」

「弟が今度1年生になるねん。ショウガイジやねん」と語る子どもの話を聞いて家を訪ねました。カオル君はベビーベッドに寝ていました。言葉は発しない、視力聴力もない、薬を混ぜた流動食をカテーテルで注入、自力移動はできない…。お母さんの説明を受けていると、お父さんが「義務教育で学校へ行かさなければ罪になるのなら、わしは牢屋に入ってもかまわん。カオルを家に置いておく」厳しい口調で言い放ちました。

カオル君が学校で過ごす姿が想像できず「無理やな」との思いがよぎります。その時お母さんが「カオルを抱いてみるか」、ひょいっと私の腕に預けました。カオル君のあたたかさが伝わりました。その瞬間「大丈夫。一緒にやれる」電流のように全身を走りました。以後、カオル君に会いたくて家庭訪問を繰り返し、両親から学校や友だちという言葉が漏れるようになりました。一方学校では命の保障ができない、専門家がない、施設設備が整わない、授業が分かるわけがない、お客さんになって本人がかわいそうだ…、と否定的な話ばかり出てきます。

3学期、カオル君と両親に職員会議に出てもらいました。矢継ぎ早の質問に答えた後、お父さんは静かに力を込めた声で発言しました。「音楽の時間子どもたちが歌っている教室で、母親の腕に抱かれたカオルが学習していないと、先生らは言えるのか」。反論する者はありませんでした。新学期、畳とベッドを置いた一風変わった教室が出現しました。子どもたちはベッドを囲んでカオル君に話しかけます。粘土で遊びます。「2たす3、こうするんやで」とやさしく指を折って教えています。学ぶ力は点数では測れないと肝に銘じました。

## 共に学び共に育つ権利

初めての1年生の担任。目を輝かせる子どもたちを想像して教室に向かいましたが私の言葉が届かない。喧騒が渦巻くばかりでお互いの声すら聞こえない。飛び出す子どもを追いかければ、教室ではケンカが。声はかれ、体は疲れ切ってしまいました。

「おまけに」(なんとというひどい思いが浮かんだのでしょうか!) クラスには脳性まひの障害があるしんぺい君がいます。自信がなく心が折れそうになります。しかし「ありがたいことに」(なんとずるい言い方でしょうか!)、3教科以外は支援学級で過ごすことになり何とかなるかもと思いました。ところが「困ったことに」(なんと自分勝手なのでしょうか!) お母さんは「校区に住んでいるのだから、一緒に勉強してほしい」と声を上げたのです。両親と学校側との話し合いは厳しい言葉も交えながら続きましたが、2学期から登校から下校まですべての時間をクラスで過ごすようになりました。

クラスが変わり給食もトイレ介助も先を競うかのように子どもたちが関わります。放課後は毎日しんぺい君の家に集まり、バギーで公園に出かけます。しんぺい君をめぐって話し合いが生まれ、しんぺい君も負けじと発言して、周りも聞き漏らすまいと耳をそばだてます。握りしめたエンピツをひっかくように動かして、自分の力で書き始めました。

しんぺい君は、友だちに伝えたいから立ち上がり全身をくねらせて発言します。友だちに読んでほしいからエンピツを動かします。口や手を動かす訓練をしたから「共に学べる」のではありません。子どもは子どもの中で育つのです。

この当時両親の主張は「運動」でしたが、障害者権利条約が批准された現在では「権利」であり、学校には本人保護者の願いを尊重し実現する義務と責任が課せられています。

## 障害者が高校を受験する

優太郎さんは、寝台型のストレッチャーで24時間介護を受けて生活する人工呼吸器ユーザーです。自力で動かせるのは瞳孔とまぶた。目を閉じればイエス、閉じなければノー、今のところ唯一の意思表示の手段です。幼児療育園から支援学校に、その後地域の中学校に入学しました。とはいえ、決して順風満帆な中学校生活ではありません。むしろ次々と生起する問題を経験しながら教職員も生徒たちも優太郎さんも大きく変わって行きました。

3年生になって優太郎さんは、高校へ行きたいとはっきりと主張したのです。受験を拒否する学校はありませんが「ただし合格点をとること」という訳です。「他の受験生との公平性」にこだわる教育委員会と合理的配慮を求めて試験前日まで話し合った結果、別室で、中学教員が問題を読み上げてまばたきの回答を読み取り、高校教員が筆記する。部屋に看護師が待機するということになりました。

それでも優太郎さんは点数がとれません。だってそれが優太郎さんの障害なのですから。国・数・理・社・英の合計点は何を表すのか。身長・体重・胸囲・座高・視力の合計値同様に無意味です。「排除」のための理由づけです。

優太郎さんは定員割れした定時制高校の2次試験に挑戦しました。ひとりで居並ぶ面接官の前に出た優太郎さん「あなたの名前は〇〇ですか?」と問われて、ゆっくりとまばたきを返し、さらに「高校で学びたいですか」の問いには大きくはっきりとまばたきしたにちがいありません。

見事合格。大阪では「定員内不合格を出さない」という「約束」が守られています。現在約3000人の様々な障害のある生徒が府立高校で学んでいます。進学率が98%を超える今、高校で学びたいと願う人を拒否する理由は何もありません。

## 学校の基準に合わせるのか、学校が変わるのか

大阪府立の工科高校に通うカンさんのお母さんから「懇談会に同席してくれないか」と声が掛かりました。教頭、支援コーディネーター、学年主任、担任が居並ぶ前に座る緊張感はなかなかのものです。「難しいですね」、成績表を示しながら切り出します。「どの教科も40点の基準点に届かない。居残り補習、プリント、やれることは何でもやっているのだが」と担任が言えば、教頭は「カン君がこの高校を選んだことがよかったのかどうかも聞いてみたい」と声を挟みます。暗に転学、退学までにおわせます、それがカンさんのためだと言わんばかりに。

カンさんは高校が大好き、友だちも **できました**。気さくで明るい性格で教員たちの人気者です。ところがテストの前になると家庭での表情が曇り、親にあたり物を投げつけることもありました。知的障害のあるカンさんは、40点という基準点を超えることがどうしてもできません。学校は40点をとれるように一生懸命工夫するのですが、成績が上がらない。打つ手がないと、お母さんに訴えます。

お母さんは静かにきっぱりと言いました、「先生たちはカンを学校の基準に合わせることばかり言っているが、学校の基準をカンに合わせて変えることはできないのか。それが合理的配慮ではないのですか」と。学校は教育委員会とも相談し、出席と授業のノート、独自課題の提出などを総合的に評価する柔軟な仕組みを作りました。カンさんは3年生に進級し見事卒業することができました。

高校の教員は経験がないのです。分からないから受け入れないのではなく、まず始めてみましょうと、権利条約も国内法もインクルーシブ教育を提案し、教員の背中を押しています。

## 分離から共生へ、はっきりと舵を切る

分離から共生へははっきりとかじを切らなければならない。コロナの世界的大流行で生と死や生き延びるということを日常の中で考えざるを得なくなったとき鮮明に浮かんできました。人間は動物の中で最も弱い存在で、一人では生きて行けないから、共生し協働しながら生き延びてきた。政治、経済、文化、そして教育も「共に生きる」ことを目標に設計されなければならないと改めて思いました。

しかし日本の学校では多様性の尊重、ちがいを認め合う、差別を許さないと言いながら、障害児を「分離」した教育が平然と行われています。インクルーシブ教育は目指すべき「理想的な教育」だという声があります。友だちの待つ教室という理想郷をめざして、障害児は「別の場所」で自分たちに「欠けている」ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルをみがき、体の機能を鍛えるというのです。それが「直れば」、あるいは「改善すれば」入れてあげると言わんばかりに。なぜ障害者だけが「変わる」ことを求められるのか、変わるべきは教室であり、学校の側ではないのでしょうか。

一緒にいるから問題が起こり、問題が起こるから学習が生まれるのです。さまざまに生起する問題を子どもたちが試行錯誤し、解決しながら学び合う中で教室が変わり、教員、授業、学校が変わります。インクルーシブ教育は共にいなければ始まりません。